

# 平声軽点の消滅過程について

## 一六声体系から四声体系への移行一

鈴木 豊

キーワード：平声軽点 下降調 差声方式 図書寮本『類聚名義抄』 アクセント体系

**要 旨** 差声方式が六声体系であると認められる資料（平声軽点と平声点の位置がはっきりと区別されている資料）として岩崎本『日本書紀』・『金光明最勝王経音義』・半井家本『医心方』・図書寮本『類聚名義抄』があるが、それらの資料に見られる平声軽点注記のある語彙や注記位置などについて検討してみると、その様相は必ずしも一様ではない。六声体系であることが明らかである資料であっても、声点注記例の中には平声軽点を平声点に移し誤ったものや四声体系で注記されたと考えられるものが含まれており、必ずしも平声軽点が期待される拍（すなわち下降調拍）に平声軽点が注記されているわけではない。図書寮本『類聚名義抄』では形容詞終止形語末に約 100 例の声点注記があり、平声軽点と上声点と同程度の割合で注記されているが、そこに両者を分かつ規則性は認められない。このことから、(1)声点は撰者のアクセントを注記したのではなく、当時存在したであろう声点付和訓を類聚してそれを正確に移点したものであり、(2)原撰本『類聚名義抄』成立時(1100年頃)に形容詞終止形語末拍はすでに高平調に発音されていた、との結論に達した。図書寮本類聚名義抄は六声体系の資料としては末期の資料であると同時に、その内部に四声体系の混入が見られることのほかに、全面的に双点注記による濁音表示を行う、片仮名に声点注記を行う、声点の形態が簡略なものであるなど、その後の声点資料では一般的になっていく新しい声点の用法を兼ね備えている。これまで図書寮本類聚名義抄は六声体系の代表的資料と見なされその古さが強調されてきたが、むしろそれまでの資料には見られない声点資料としての新しさを備えていることを重視し、後に現れる四声体系の資料の先蹤となった資料であると位置付けられるべきである。

### 1. はじめに

平安・鎌倉時代の京都アクセントを反映する声点資料には下降調を表示する平声軽点をもつものともたないものがあり、一般に前者を「六声体系」後者を「四声体系」という術語をもって呼称し分類することが行われている。また、概略六声体系の資料は平安時代後期の京都アクセントを表し、四声体系の資料は鎌倉時代のアクセントを表すとも考えられている。平声軽点は差声方式の異なる新旧声点資料群を分類するさいの指標となっている。四声体

系の資料に平声軽点が存在しないことのもっとも主要な理由は平安時代末頃に下降調から高平調にというアクセント変化が生じたことにあると考えられるが、現存する資料群の声点は全体として複雑な様相を呈しており容易にその合理的解釈を許さない状況である。

小論では声点資料に見える平声軽点の出現位置の違いに着目し、下降調から高平調というアクセント変化がどのような過程を経て進化したのかについて考えたい。より具体的には、図書寮本『類聚名義抄』の形容詞終止形語末の仮名に注記された声点の分布に対して、通説(小松英雄(1971))とは異なる解釈を与えようとするものである。

## 2. 研究史・研究方法

図書寮本『類聚名義抄』に見える平声軽点をめぐる研究の詳しい歴史については小松英雄(1971)・望月郁子(1992)・鈴木豊(1985)(1999)(2010)等を参照していただきたい。

「六声体系」・「四声体系」の差声方式(「差声体系」とも呼ばれる)は平声軽点の有無によって便宜的に決定されている場合がある。つまり平声軽点(1例でも)存在すれば六声体系と見なし、平声軽点(1例も)存在しなければ四声体系であると見なすわけである。しかし平声軽点は移点の際に平声位置に移し誤られることはあっても上声位置に移し誤られることはないので、下降調(と推定される)拍に平声点(注記されている資料の本来の差声方式は六声体系であったことになる)が注記されている資料の本来の差声方式は六声体系であったことになる。小論の筆者は後者の立場をとっているために、まったく平声軽点が存在しない現存『和名類聚抄』声点本や仁和寺本『医心方』も本来は六声体系であったと考えて、これらの資料を四声体系であるとは見なさない。移点によって平声軽点(平声点位置に移されている六声体系の資料)と見なすことになる。

小松英雄(1956)は図書寮本『類聚名義抄』形容詞終止形語末(など)に注記されている声点について、原撰本編者が自らのアクセントに基づいて声点を注記したが、当時形容詞語末のアクセントは下降から高平への変化の途上にあつたため平声軽点と上声点とが同程度の割合で注記されることになったと解釈した。つまり図書寮本『類聚名義抄』の声点は原撰本のアクセント(1100年頃の京都アクセント)が注記されており、全体として声点は均質なものであると見なされているわけである。この解釈は小松英雄(1971:p.191)において若干の変更がなされている。小論と深く関わるところなので要約せず以下に引用する。

【補説】前田富祺氏は①、声点と合点とをてがかりとして、世尊寺本『字鏡』の成立を考えるという、独自の接近をこころみているが、そのなかで、この章の旧稿の趣旨が、有効かつ批判的にとりいれられていることは、小論の筆者として、たいへんうれしいことである。

同じ資料の中で同じ和訓の声点が異なっている場合に、その和訓のアクセントがゆれている可能性とともに、一方が原拠となった本の声点をそのまま写した(つまり時代的には古いアクセント型を反映する)という、その資料の声点が均質でない可能性があるのである。

という提言は、「可能性」ということばをもちいてひかえめになされているが、もし、そのようなことが確定的になるならば、いわゆる《アクセント史》のよりどころを根底から動かしかねないものであるだけに、今後、さらに討究の必要があるであろう。

なお、旧稿においては図書寮本の加点者が、まったく独自に加点したものであるということ、比較的単純に論じたのであるが、その後、第3章にのべたところの、『和名類聚抄』において濁音がなに単声点をくわえている例の評価を再考するにいたって、小論の筆者自身も、より弾力性のあるかんがえたにかわっている。ただし、この章にのべた基本的なちば、すなわち、く声点というものが、現実に生命をもっていた時期に関するかぎり、そこにしめされているところの声点は、語の同認を第一次的な機能としてもつものであるから、その時代に普通におこなわれていた語調をしめしていなければならない、また、実際にそうになっているはずである」というたてまえは、依然としてかわらないとかんがえている。

#### ①前田富祺「世尊寺本字鏡の成立」

小論ではまず図書寮本『類聚名義抄』形容詞終止形語末声点について改めて検討し、問題点を洗い出すことから始める。また、他の六声体系資料の平声軽点についても分析を行い、そのうえで図書寮本『類聚名義抄』声点の「均質性」について考察を加える

### 3. 各資料の特徴と問題点

#### 3.1 図書寮本『類聚名義抄』

表1は図書寮本『類聚名義抄』形容詞終止形語末に声点注記がある例のすべてを複製本(1969年 勉誠社)から抜き出して一覧できるようにしたものである。表の各欄はAみだし、B出典、C声点、Dページ数、E行数、F高起式/低起式の別、G拍数、H東点/平声点の別、I備考(声点の注記位置・万葉

表1 図書寮本『類聚名義抄』形容詞終止形語末声点一覧(出現順)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	いさぎよし	書	上上上双上東	11	6	高	5	東	
2	あまねし	後漢	平平平上	12	4	低	4	上	
3	ふかし	老子	平平東	15	1	低	3	東	
4	とし	詩	平東	15	5	低	2	東	
5	ふかし	詩	平平東	17	5	低	3	東	
6	おもしろし	遊	平平平東	17	7	低	5	東	
7	あはし	集	平平東	22	4	低	3	東	
8	ふかし	後詩	平平上	28	4	低	3	上	
9	しげし	後	平平双東	48	5	低	3	東	
10	あつし	後	上上東	52	4	高	3	東	
11	ふかし	書	平平東	53	3	低	3	東	
12	あつし	巽	上上東	54	3	高	3	東	
13	あまねし	巽	平平平東	55	5	低	4	東	
14	さむし	巽	平平東	67	5	低	3	東	
15	きらぎらし	(巽)	平平平双平東	67	6	低	5	東	
16	いさぎよし	巽	上上上双上東	67	7	高	5	東	
17	むなし	白	上上上	69	2	高	3	上	
18	よし	詩	平東	78	1	低	2	東	
19	あやし	巽	平平上	78	6	低	3	上	
20	あやし	巽	平平上	80	2	低	3	上	
21	かまみすし	列	平平平平東	81	7	低	5	東	
22	かまびすし	公	平平平双平上	82	3	低	5	上	上は下寄り
23	かまみすし	切	平平平平上	82	3	低	5	上	上は下寄り
24	おそし	論吾	上上上	87	3	高	3	上	
25	やみやゐし	白	平平平平東	92	2	低	5	東	
26	たかし	巽	平平東	104	2	低	3	東	
27	うちはやし	季	上上双上上上	113	2	高	5	上	宇知波夜之
28	うとし	記	上上東	114	1	高	3	東	
29	さわがし	公	平平平双上	114	7	低	4	上	
30	あぢきなし	公	平平平平平東	125	6	低	5	東	
31	つきづきし	遊	平平〇〇上	132	2	低	5	上	
32	きびし	詩	平平双上	137	7	低	3	上	
33	さがし	詩	平平双上	138	2	低	3	上	
34	うちはやし	集	上上双上上東	143	3	低	5	東	
35	さがし	集	平平双上	143	4	低	3	上	
36	さがし	巽	平平双東	143	4	低	3	東	
37	さがし	集	平平双東	143	6	低	3	東	
38	さがし	巽	平平双東	143	6	低	3	東	
39	さがし	集	平平双上	144	1	低	3	上	
40	さがし	巽	平平双東	144	3	低	3	東	
41	たかし	巽	平平上	144	3	低	3	上	上は下寄り
42	たかし	巽	平平上	144	4	低	3	上	
43	さがし	巽	平平上	144	5	低	3	上	
44	たかし	(巽)	平平上	144	5	低	3	上	上は下寄り
45	たかし	〇	平平上	148	7	低	3	上	
46	ふとし	〇	平平上	156	5	低	3	上	シの上?
47	あをし	〇	平平上	165	2	低	3	上	
48	あやし	〇	平平上	166	4	低	3	上	
49	あまねし	論	平平平東	169	5	低	4	東	
50	さがし	列	平平双上	200	1	低	3	上	

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
51	さがし	巽	平平双上	203	6	低	3	上	
52	ながし	○	平平双上	203	6	低	3	上	
53	ちかし	書	平平上	204	1	低	3	上	
54	いやし	巽	平上東	206	7	低	3	東	
55	いやし	○	平上東	206	7	低	3	東	
56	あらし	集	上上上	215	4	高	3	上	
57	ひとし	易	平平上	219	5	低	3	上	
58	ひとし	白	平平上	227	7	低	3	上	
59	うづたかし	公詩	上上双上上上	230	2	高	5	上	
60	かたし		上上上	233	3	高	3	上	
61	あちきなし	遊	平平双平東	237	6	低	5	東	
62	ただし	論	平平双東	238	7	低	3	東	
63	こころよし	記	平平平東	239	2	低	5	東	東は下寄り
64	たくまし	易	平平平東	239	2	低	3	東	
65	いたし	集	平平上	240	4	低	3	上	
66	なつかしむ	論	平平平2平上	244	7	低	4	2	2は東上
67	やすし	詩	平平東	244	7	低	3	東	
68	ゆるし	集	平平東	248	6	低	3	東	
69	おそし	集	上上上	248	7	高	3	上	
70	みぬくし	朱	平平平東	249	2	低	4	東	弥奴久之
71	あまねし	詩	平平平東	251	2	低	4	東	
72	こひし	白	平平東	251	2	低	3	東	
73	ひさし	易	平平東	251	2	低	3	東	
74	いたし	集	平平上	253	6	低	3	上	
75	つたなし	記	上上上上	266	4	高	4	上	
76	やすし	(巽)	平平東	273	1	低	3	東	
77	なつかしむ	論	平平平東上○	273	2	低	4	上	
78	いたし	書	平平上	273	5	低	3	上	
79	はなはだし	○	上上上上双東	278	1	高	5	東	
80	はなはだし	遊	上上上上双東	278	1	高	5	東	
81	めづらし	遊	平平双平東	278	1	低	4	東	
82	あやふし	○	上上上東	278	2	高	4	東	
83	すくなし	論	平平平上	285	5	低	4	上	
84	しろし	詩	平平東	289	3	低	3	東	
85	よしなし	任	上上平上	289	7	高	4	上	
86	あかし	季	上上上	293	1	高	3	上	安加之
87	くはし	書	平平上	298	3	低	3	上	
88	ほそし	論	平平上	298	3	低	3	上	
89	くはし	集	平平東	298	4	低	3	東	
90	すべなし	遊	平上平上	302	3	低	4	上	
91	しげし	巽	平平双上	304	6	低	3	上	
92	ほそし	公	平平上	305	1	低	3	上	
93	やすし	論	平平上	311	7	低	3	上	
94	おほし	切	平平上	313	1	低	3	上	逆向き
95	いさぎよし	詩	上上上双上東	316	6	高	5	東	
96	きびし	順	平平双上	317	4	低	3	上	岐比之 和名現存本な
97	あつかはし	○	上上上上上	321	6	高	5	上	
98	よし	書	平上	330	6	低	2	上	
99	かなし	詩	上上上	340	2	高	3	上	

仮名の字母など)を表す。

表1から図書寮本類聚名義抄の形容詞語末の声点は、同一出典、同一語であつても東/上の両様の注記がある、さらに同一頁に同一語がある場合にも東/上の例が見られることから声点は同一人物が自身のアクセントにしたがつて差したものは見なせない。図書寮本『類聚名義抄』に声点付和訓が大量に存在するのは当時声点付和訓がそれだけ存在していたことにほかならない。『和名類聚抄』成立時に『日本紀私記』と『本草和名』に声点注記があり、和名抄はそれらの声点をも取り込むことになったと考えられる。『和名類聚抄』序に記す延喜「公望私記」には弘仁・承和・元慶の三度の講書の成果として多量の声点が注記されていたと考えられる。918年成立の『本草和名』もおそらくは『日本紀私記』にならつて声点が注記されたのだろう(鈴木豊(2010)参照)。その後も大学寮での講義(それを記録したものが師説)を中心に声点付和訓は数を増加させていき、『類聚名義抄』成立時には相当の量にのぼつていたと推測される。図書寮本『類聚名義抄』の和訓が先行する文献からの抄出によつていならば、そこに注記されている声点はまず第一に尊重すべきものただらう。同一語に東/上の両様の声点注記が見られるのは依拠した資料の和訓にすでにそのような形で声点注記がなされていたからであり、図書寮本『類聚名義抄』の編者はそれを正確に移点したからと考えられる。

表2からはアクセント型や拍数による違いは見られないこと、表4からは同一語でも東/平の「ゆれ」が見られることが明らかとなった。このことからこれらの声点が同一の人物(原撰本の撰者)が差した可能性は小さいと見なくてはならない。表3から同一出典でも同じように東/平が「ゆれ」ていることが知られるが、このことの意味は後述する(3.2参照)。

図書寮本『類聚名義抄』の声点が移点されたものがあると考え理由として、『和名類聚抄』から採られた和訓にだけ濁音拍に単点注記の例があること(小松英雄(1971))があるが、その他に図書寮本の声点の均質性を疑わせる例を以下にあげる。

- (1)複製本143～144頁にかけて和訓「サガシ」の声点注記が7例あるが、そのうち東点は4例、上声点は3例である。一人の差声者が同一行や隣り合う行にある同一語に異なる声点を差すことはまずないことだろう。
- (2)表3から同一語に2例以上の双点注記が存在する語の20語のうち半数の10語で平声軽と上声点が注記されていることが知られる。たとえば2例存在する「うちはやし」(表1 No. 27・34)に対する声点注記は〈上上双上上東〉〈上上双上上上〉であり、No. 27は万葉仮名訓・No. 34は片仮名訓への注記である。
- (3)「きびし」は出典注記に「順」とあり『和名類聚抄』からの引用であるが、「岐比之(平平双上)」は現存和名抄に存在しない和訓である。おそらく撰者

表2 東点/上声点注記延べ語数(拍数・式別)

式	拍数 声点	2拍		3拍		4拍		5拍		合計		
		東	上	東	上	東	上	東	上	東	上	東+上
高低起	高起	0	0	3	7	1	2	4	3	9	12	21
	低起	2	1	21	32	7	4	8	4	39	41	80
合計		2	1	24	39	8	6	14	7	48	53	101
		3		63		14		21		101		

表3 東点/上声点注記延べ語数(出典別)

順	出典	計	東:上	順	出典	計	東:上	順	出典	計	東:上
1	巽 (巽)	16	9:7	8	公 公任	6	1:5	〃	切 列	2	0:2
2	詩	12	7:5	9	遊	1	0:1	〃	李	2	1:1
2	集	11	5:6	10	白	6	4:2	〃	朱	2	0:
4	無し	10	3:7	11	易	4	3:2	17	朱 順	1	1:0
5	論	7	4:3	11	記	3	2:1	〃	順 老子	1	0:1
6	論吾	1	0:1	13	後	3	2:1	〃		1	1:0
7	書	6	2:4		後漢	2	1:1				
						1	0:1				

表4 東点/上声点注記延べ語数(語別)

順	語	計	東:上	順	語	計	東:上	順	語	計	東:上
1	さがし	10	6:4	〃	ほそし	2	0:2	〃	さわがし	1	0:1
2	たかし	5	1:4	21	よし	2	2:0	〃	しろし	1	1:0
3	あまねし	4	3:1	〃	あかし	1	0:1	〃	すくなし	1	0:1
〃	ふかし	4	3:1	〃	あつかはし	1	0:1	〃	すべなし	1	0:1
5	いさぎよし	3	3:0	〃	あはし	1	1:0	〃	たくまし	1	1:0
〃	あやし	3	0:3	〃	あやふし	1	1:0	〃	ただし	1	1:0
〃	いやし	3	2:1	〃	あらし	1	0:1	〃	たのし	1	0:1
〃	なつかしむず	3	2:1	〃	あをし	1	0:1	〃	ちかし	1	0:1
〃	やすし	3	2:1	〃	うづたかし	1	0:1	〃	つきづきし	1	0:1
10	あぢきなし	2	2:0	〃	うとし	1	1:0	〃	つたなし	1	0:1
〃	あつし	2	2:0	〃	おほし	1	0:1	〃	とし	1	1:0
〃	いたし	2	0:2	〃	おもしろし	1	1:0	〃	ながし	1	0:1
〃	うちはやし	2	1:1	〃	かたし	1	0:1	〃	ひさし	1	1:0
〃	おそし	2	0:2	〃	かなし	1	0:1	〃	みぬくし	1	1:0
〃	かまみすし	2	1:1	〃	かまびすし	1	0:1	〃	むなし	1	1:0
〃	きびし	2	0:2	〃	きらぎらし	1	1:0	〃	めづらし	1	1:0
〃	くはし	2	1:1	〃	こころよし	1	1:0	〃	やみやめし	1	1:0
〃	しげし	2	1:1	〃	こひし	1	1:0	〃	ゆるし	1	1:0
〃	ひとし	2	0:2	〃	さむし	1	1:0	〃	よしなし	1	0:1

が用いた『和名類聚抄』の「後人増補」部分からとられたものだろう。よって『和名類聚抄』の声点ではあるが F > H の変化を反映した「平平上」という新しい声点注記がなされていたのだろう。

(4)この他に形容詞の例ではないが、「美曾〈上上双〉(溝)」(23頁5行)の声点注記に加えて「文選師説ミソ〈上東双〉」(23頁6行)とある例は引用元の資料(当時存在したであろう『文選』訓点本)におそらく「師説」とあり、その和訓が抄出されたさいに「文選師説」に改められたものだろう。こまつひでお(1977)において上東型存在の証拠とされた例であるが、「ソ」の東点の位置は平声点と区別がつかないほど低い位置に注記されている。「ソ」の仮名に平声点が注記された例は非常に少なく、以下の4例のみである(〈平双〉点の注記例は存在しない)。

- 幾ー ソコハク〈平上平双平〉 75頁2行  
 作ー ソコハク〈平上平双平〉遊 75頁3行  
 議ー ソヘコト〈平平平平〉遊 85頁5行  
 岐 ソハタツ〈平平双上平〉集 103頁6行

いずれの例も「文選師説ミソ」の声点注記位置と区別するのが難しい位置に声点が注記されている。小論の筆者は「文選師説ミソ」の声点は原撰本撰者が引用元の〈上東〉を抄出のさいに〈上平〉位置に誤った、あるいは図書館本の移点者が東点を平声点位置に誤ったものと考え。引用元の『文選』訓点本に「師説〈上平〉とあったとは考えにくく、そこには〈上東〉の注記があったと考えるが、図書館本の写しがこの部分に関しては「甘い」と見るのである。これは形容詞の場合では語末の仮名に平声軽点が注記される(あるいは上声点が注記される)ことが容易に知られるのに対して、平声軽点の位置に対する移点者の注意が行き届かなかった(古く「ミゾ(溝)」の語末が下降調に発音されたことを知り得なかった)ためだろう。よって「美曾〈上上双〉」の声点も撰者が差したのではなく、抄出されて移点されたものだろう。表1 No. 94「オホシ〈平平上〉」313頁1行が逆向きに書かれていること(他に横向きの例もあり)も原撰本『類聚名義抄』の編纂作業において訓点本から抄出した部分を記した短冊(カード)が利用されていたことを偲ばせる。

### 3.2 岩崎本『日本書紀』

岩崎本『日本書紀』は他の『日本書紀』声点本とは異なり平声軽点と平声点とが厳密に区別されている。その一端を他本の声点注記と併せて以下に示す。

- 譬武伽能古摩(日向の駒)  
 〈東平平上上〉岩崎 22-290  
 〈平平平平上上〉兼右 22-20 裏5

- 〈上平平上上〉 図書 22-299 北野 22-24 表 3 内閣 22-19 裏 6  
 勾礼能摩差比 (呉の真刀)  
〈上上上平平東〉 岩崎 22-291 図書 22-300  
〈上上上平平平〉 兼右 22-20 裏 6  
〈上上上上上平〉 北野 22-24 表 3  
〈上上上上上上〉 内閣 22-19 裏 7

岩崎本以外の本では平声軽点注記は稀で、多くの場合本来の平声軽点を平声点位置に注記していると考えられる。以下にその例を示す。

- 阿武柯枳都枳 (虻搔き付き)  
〈平平平上上上〉 前田 14-123 図書 14-143  
阿武柯枳都枳都 (虻搔き付きつ)  
〈平平平上上上平〉 熱田 14-134  
〈平平平上平平平〉 兼右 14-10 表 8 内閣 14-9 裏 7  
曾能阿武鳴 (その虻を)  
〈上上平平平〉 前田 14-124 図書 14-143 兼右 14-10 裏 1 内閣 14-9 裏 7  
〈上上上上上〉 熱田 14-135

次に数多くの片仮名表記の和訓に声点注記のある前田本『日本書紀』から形容詞終止形語末の仮名に声点のあるものをすべて抜き出して以下に示す(配列は五十音順)。

- アヤシ 〈平平平〉 [異] 前田 11- 80  
ミカタチミスカタウルワシ [貌容美麗] 前田 11-5  
〈上上上上上上上上上平平平東〉  
イトウルハシ 〈上平平平上〉 [最好] 前田 14-353  
オホムヤマヒイヨ\ノオモシ [疾弥甚] 前田 14-416  
〈平平平上上上上上〇〇上上東〉  
カシコシ 〈平〇〇東〉 [懼] 前田 11-330  
チカラありころこハシトイフ [有力心強] 前田 14-325  
〈上上上〇〇〇〇〇平〇上平〇〇〉  
タケクツヨシ 〈平上平平平上〉 [猛幹] 前田 11-313  
ケフリトホシ 〈上上上上上東〉 [煙火万里] 前田 14-418  
キヤナシ 〈〇上上平〉 [无礼] 前田 11-285  
カモソフルコトナシ [蘭澤無加] 前田 14-176  
〈上中上上上上平〇平平〉  
アリクルコトヒサシ [由来尚] 前田 14-271  
〈平上上上平平平上〉  
ホシトノタマフ [欲] 前田 11-224

〈平平上平平上〉

マタイノチミシカシトイフヘカラス [不復稱天] 前田 14-424

〈上平平平〇平平平東平上平平上平〉

全 13 例のうち東点 5 例・上声点 4 例・平声点 4 例である。このうちの平声点は平声軽点を平声位置に誤って移点したものと考えられる（前田本の声点は必ずしも厳密に注記されているとは言いがたく平声点と上声点の中間位置の点〔小論では「中」として表示〕も散見する）ので、本来は東点 9 例上声点 4 例であったと推定される。この分布は表 3 図書寮本『類聚名義抄』の形容詞終止形語末の声点の出典のうち、注記数第 1 位「巽」（文選）の 9:7、第 2 位「詩」（毛詩）の 7:5 と同様の性質を有している。仮に原撰本『類聚名義抄』撰者が前田本『日本書紀』から声点付和訓を採録したとすれば、形容詞語末の点は「ゆれ」ていることになるのである。

参考までに他の『日本書紀』声点本の形容詞終止形語末の声点をしめせば以下のとおり全 6 例が上声点注記である。

ケフリトホシ (〇〇〇上上上) [煙火万里] 図書 14-499

サカシ (平平上) [明達] 兼右 3- 1 表 5

サカシ [明達] 内閣 3- 1 表 5 (平中上)

スクレテタ、ハシ

〈上上上〇平平上上〉 [魁偉] 兼右 4-2 表 5

〈上上上〇平平〇上〉 [魁偉] 内閣 4-1 裏 4

### 3.3 『金光明最勝王経音義』

下降調拍の仮名には平声軽点が注記されており、上声点が注記されることはない。形容詞「いときなし」「かうばし」「かたし」「かまみすし」「さわがし」「はやし」「ものうし」「よわし」の終止形語末の声点には例外なく平声軽点が注記されている。また平声軽点を平声位置に誤ることもない。このことからこの資料の声点は撰者自身のアクセントを注意深く差したものであると考えてよいだろう。

高平調を表す「流」の仮名に「比流<平東>」の声点注記があることから、撰者には下降調は高平調によって代替可能であるとの認識があったと考えられよう。

### 3.4 半井家本『医心方』

表 5 は半井家本『医心方』で下降調拍の仮名に対する声点注記のすべてを採りだして品詞別・拍数別に配列したものである。参考として同じく平安期

表5『医心方』下降調拍の仮名に対する声点注記一覧

みだし語	漢字	和訓	半井家本声点	仁和寺本声点	備考
1 拍名詞第2類					
うや	鴉矢	宇加美乃也	東 平平平東	なし 平平平平	
2 拍名詞第5類					
あゆ きみ 同 同 同 くず くも こひ はむ ひる ふな	鮎 黍    葛 蜘蛛 鯉 鱧 蛭 鮒	阿由 支美 阿加支々美 支奈留支美 支美乃毛知 久須乃祢 久毛 古比 波牟 比留 布奈	平上 平上 平上平平上 平平上平上 平平平上上 平上平平 平東 平上 平東 平東 平上	なし なし なし なし なし 平上平平 なし なし なし なし なし	
形容詞					
すし 同 あかし うすし しろし ふるし  同 同 ちひさし 同	酸  赤 薄 白 古    小	須支奈都女 スキナツメ 阿加支々美 加波宇須岐々波多 之呂支阿波 不留支不弓乃都加 乃波比 布留岐乎久都乃之 岐 布留岐加末古毛 ---支----- 知比佐岐古介 ----支-- 知比佐支衣	平東平平平 平東平平平 平上平平上 平平平上平上上平 平平平平上 平上平上上上平平 平上上 平平平○○○○○ ○ 平平上上上上平 平平平東平平 平平平東平平 平平平平平	なし なし なし なし なし なし なし なし なし 平平上上上上平 平平平平平 なし	図名も

の書写とされる仁和寺本の声点注記例もあげた。

『医心方』の声点は同一語「きび(黍)」に対して東点と平声点の両用の注記も見られるが、全体としてよく古態を留めていると見なせよう。半井家本(図書寮本『類聚名義抄』も)の「知比佐岐古介(平平平東平平)」は『本草和名』の和訓と声点の姿をとどめているのではなかろうか。

山本信吉(1994)によれば半井家本『医心方』巻第八に貼付されている「天養二年加點識語」は半井家本が「天養二年二月に宇治入道太相国すなわち藤原頼通の所持していた本によって加點されたことを伝えた」ものである。訓

点の移点作業は藤原頼通が所持していた『医心方』(宇治本と呼ばれる)をもとにして行ったことが記されている。山本信吉(1994)から解説文を引用する。

- ①宇治本の訓読点を天養二年加点本に写し移す作業は少内記藤原中光が行った。
  - ②移点が正確に行われたかどうかの比較・確認は助教中原安定が行った。
  - ③移点・比校の作業の間、天養二年加点本の本文について気がついた疑問の箇所については、直講中原師長、医博士丹波知頼、丹波重成等が医家本を本文と比べ合せた。
  - ④また文殿が加えた勘物、すなわち注釈、関連記事の注記については、直講中原師長が墨書で書き入れ、それには朱の合点を附した。
- と述べ、更に藤原頼通の所持本である宇治本の訓読点について、それが二種の点からなっていることを説明して、
- ①初めの点は藤原行盛が加えたもので、その内容は朱星点と墨書の仮名であること。
  - ②次に重ねて加えられた点は丹波重基が加えたもので、その内容は朱星点と仮名の勘物、それに主筆の点で儒点、すなわち儒学者の訓読点を記している。

山本氏は半井家本に対して行われた天養二年の加点作業は「その規模、内容からみて朝廷の指揮、もしくは指導で行われたものと認められ、加点後禁裏本として宮廷内に『医心方』の証本として大切に伝来したと思われる」と記している。このことは岩崎本『日本書紀』巻二十二・巻二十四の書写と訓点の移点作業を考えるとときにおおいに参考にすべきものとする。

また山本信吉(1994)は天養二年加点本(半井家本)の目録および本文中に存在する宇治本および他本との相違、移動を記した注記から「諸薬和名第十」の章は、天養二年加点本の底本にはなかったが、重基本と或本には記載があり、重忠本には記載がない。しかし宇治本にはあるので、書き加えた」とあることを明らかにし、「この「諸薬和名」は明らかに日本撰の文章でありこの章が当初から丹波康頼撰述の原本に存在したか否かは検討を要するものであろう」とする。『医心方』の声点の大部分は「諸薬和名」の万葉仮名訓に注記されたものなのでこの指摘がもつ意味は大きい。『医心方』「諸薬和名」の大部分は配列もそのままに『本草和名』から採られたと考えられるが、それが『医心方』成立時ではなく、後の増補の可能性があるということである。

半井家本の訓点のもと藤原頼通所持本に文章博士藤原行盛によって加点されたものを、天養二年に少内記藤原中光が移点したものである。このように二度の移点は当代を代表する文章道出身者によって慎重に行われたが、表 5

に見るように形容詞連体形に注記された声点は「すし」には東点が注記されているが、「ちひさし」には東と平、「あかし」「うすし」「しろし」には平声点、「ふるし」には平声点と上声点が注記されている。半井家本の平声軽点は注意深く注記されているので「ちひさし」の平声点を含む形容詞連体形語末の仮名の平声点は移点者藤原中光が注記位置を誤ったものとは考えにくく、親本の声点を忠実に移点した可能性が高いように思われる。また、平安時代末写とされる仁和寺本においては半井家本に比して声点注記箇所が少ないが、半井家本では東点注記のある「や」と「ちひさし」の二語に対していずれも平声点が発記されている。名詞についても「くも」「はむ」「ひる」には東点、「あゆ」「こひ」「ふな」には上声点、「きみ」には上声点2例、平声点1例が発記されている。「きみ」の平声点は形容詞連体形語末の平声点と同様に東点を移し誤った結果によると考えられる。以上から平安時代後期(天養二年)ころ、『医心方』の声点は下降調拍に平声軽点と上声点を注記するものがあり、またすでに平声軽点の注記位置を平声点に誤ることがあったことを確認できるのである。

### 3.5(参考)『和名類聚抄』

『和名類聚抄』声点本平声軽点を注記するものはないが本来は平声軽点が発記されていたと考えられるので参考として考察を行う。

表6は『香字抄』(高山寺本・石山寺本)に声点注記がある語に対して、『本草和名』『和名類聚抄』『医心方』のそれぞれについて万葉仮名字母と声点注記位置の異同を一覧できるようにしたものである。出典資料欄の「本草」=『本草和名』、「和名抄」=『和名類聚抄』(「京」京本・「伊」=伊勢十卷本・「高」=高松宮本・「林」=林羅山書入本)、「医心」=『医心方』(「半」=半井家本・「仁」=仁和寺本)、「香字」=『香字抄』(「高」=高山寺本・「石」=石山寺本)、「名義」=『類聚名義抄』(「図」=図書寮本・「改」=改編本系諸本)。表中万葉仮名訓の欄に「-」とあるものは直前の万葉仮名と同字母であることを示す。

『和名類聚抄』と『医心方』はいずれも『本草和名』の和訓をその配列まで含めてかなり忠実に引用したと考えられるが(鈴木豊(2006)参照)、現存『和名類聚抄』は書写年時の古いものが少なく、現存諸本はとくに万葉仮名の字母に大幅な改変を被ったものが多いようである。一方声点については去声点をはじめとして古い声点注記の形をよく残しているとも考えられる。このことは改編本系『類聚名義抄』の声点についても共通することである。石山寺本『香字抄』では「めかつら」「めかま」に去声点注記が見られないので、あ

表6 『香字抄』声点付和訓一覧

万葉仮名訓	声点	本草	和名抄				医心		香字		名義		備考
			京	伊	高	林	平	仁	高	石	園	改	
古万豆奈岐 一末一 一末一那一 一末一奈木 コマツナキクサ -----草	○上上上平 上上上上平 上上上上平 なし 上上上上上双○○ 上上上上上双○	× × × × × ×	× ○ × × × ×	× × × ○ × ×	× × × × × ×	× × × × × ×	× × × × × ×	○ × × × × ×	× × × × × ×	× × × × × ○	× × × × × ○	高山寺本 観智院本	
和須礼久左 ----- ----- -----	上上上上平 上上上上平 平上上上平 なし	× × × ×	× × ○ ○	× × × ×	× ○ × ×	× × × ×	× × × ×	○ × × ×	× × × ×	× × × ×	× × × ×		
女加都良 --豆-- --豆-- --豆-- メカツラ	去平平平 去平平上 平平平上 なし 去上上上	× × × × ×	○ × × ○ ×	× × × × ×	○ × × × ×	× × × × ×	× × × × ×	× × ○ × ×	× × × × ×	× × × × ○	観智院本		
乎加豆良 ----- ----- ヲカツラ	上平平平 平平平平 なし 上○上○	× × × ×	× ○ × ×	× ○ × ×	× ○ × ×	× × × ×	× × × ×	○ × × ×	× × × ×	× × × ○	観智院本		
加宇礼牟加宇乃美 -----	平上上上上上上上 なし	× ○	× ×	× ×	× ×	× ○	× ×	× ×	○ ×	× ×	× ×		
布多末加美 ----- --太--賀-- --太--賀三 --太--賀三 --太--賀三 フタマカミ	上上上上平 なし 上上上上上 上上上上平 上上上上2 なし 上上上上双上	× ○ × × × × ×	× × × × × ○ ×	× × ○ × × × ×	× × × × × × ×	○ × × × × × ×	× × × × × × ×	○ × × × × × ×	× × × × × × ×	× × × ○ × × ○	2は平/上 観智院本		
都布祢久佐 ----- ----- 豆----- 豆-----散 都-----佐 都-----佐	上上上上平 平上双上上双平 なし 平上上上平 平平平上平 上上上上平 平○上上平	× × ○ × × × ×	× × × × × × ×	× × × × ○ × ×	× × × × × ○ ×	× × × × × × ○	× × × × × × ×	○ × × × × × ×	× ○ × × × × ×	× × × × × × ×			
奈末為 -- --万井 --万井 ナマキ ----	平上上 なし 平上上 平上平 平上上 平上○	× ○ × × × ×	○ × × ○ × ×	× × × × × ×	× × × × × ×	○ × × × × ×	× × × × × ×	○ × × × × ×	× × × × × ○	× × × × ○ ○	観智院本 観・鎮		
於毛多加 ----- オモタカ	平上平平 なし 平上○○	× ○ ×	× × ×	× × ×	× × ×	○ × ×	○ × ×	○ × ×	× × ×	× × ○	× × ○	観・鎮	



うに古く『本草和名』に声点本があり、その声点付万葉仮名訓が『和名類聚抄』『医心方』『香字抄』に採録されたのだろう。延喜「公望私記」には日本紀講書の成果として声点が注記されていたことは確実であり、『本草和名』にも声点が注記されたのではなかろうか。現存『医心方』は『本草和名』の原姿をよく留めているように思われる。

#### 4. 考察

前節で見たように、前田本『日本書紀』傍訓の形容詞終止形語末の声点、半井家本『医心方』の下降調拍の仮名に注記された声点には、平声軽点と上声点のいずれもが注記されており、また平声軽点を平声点位置に誤って移点したと考えられる例も見られた。図書寮本『類聚名義抄』形容詞終止形語末の仮名の声点に見る平声軽と上声の「ゆれ」は、原撰本作成時に撰者が利用した出典資料にすでに存在したものと推定される。出典資料の声点付和訓は「師説」「証拠」であるからこそ採用されたのであろうし、声点はその注記位置を誤らないように慎重に移点されて原撰本『類聚名義抄』に取り込まれたのだろう。撰者は抄出・類聚の作業を通じて濁音の拍の仮名の声点には双点を新たに注記することをしたが（もちろん出典においてすでに双点注記がなされているものもあっただろう）、声点の注記位置を変更することはなかっただろう。原撰本の出典においてすでに形容詞終止形語末拍の声点の半数に上声点注記されていたということは、原撰本成立時には下降調から高平調への変化は完了していたと考えられる。図書寮本『類聚名義抄』において平声軽点と上声点の両方が正確に注記されているのは、移点者に平声軽点の知識があり、かつそれを慎重に移点したからであると推定される。よって原撰本撰者が声点注記のない和訓に新たに声点を加えるとすればそれは上声点をもって行われたと推定される。改編本系『類聚名義抄』諸本で形容詞終止形語末の声点に上声点注記の割合が図書寮本よりも高くなっているのは新たに注記された声点と上声点をもって行われたからである。平声軽点が見られず、平声点位置に声点注記があることは、改編本系『類聚名義抄』の声点の注記者が平声軽点が下降調を示すことを理解していなかったことを物語っている。院政期には形容詞終止形・連体形語末の声調は高平調に変化していたことのほかに、改編本系『類聚名義抄』ではアクセント表示よりも濁音表示に重点が置かれたために、声点の位置はより曖昧になったものと考えられる。

以上の考察の結果を簡略に図示すれば表7のようになる。

六声体系の差声方式には東点と平声点の位置関係に次の二種のものがある。

A 方式 平声点の位置が平声軽点よりも右寄り

表7 平声軽点・去声点の消滅と六声体系声点資料の位置付け

---

800	900	1000	1100	1200	1300
六声	----->四声-----				[消滅]
<b>F &gt; H [平声軽の消滅]</b>					
R > H [去声点の消滅]					
声点[単点]	-----		濁声点	-----	濁点----->
[濁音の卓立表示]					
弘仁日本紀私記-[日本紀講書]-岩崎本日本書紀					
本草和名 [現存本声点無注記]					
和名類聚抄 [改編と改変]					
医心方 [本草和名和訓を追加]					
金光明最勝王經音義 [濁音]					
図書寮本類聚名義抄 [六声 B 方式・濁声点]					
改編本系類聚名義抄 [濁音卓立表示]					

---

**B 方式 平声点の位置が平声軽点の真下**

このうち A 方式は東点と平声点の区別に縦と横の二つの基準線をもつものに対し B 方式は縦位置の違いだけで両者を区別する(横の基準線のみ)。図書寮本『類聚名義抄』の声点は B 方式で、他の六声体系の資料は A 方式である(半井家本『医心方』には A・B の区別が困難なところもある)。図書寮本『類聚名義抄』の B 方式は形容詞語末位置では東点と上声点の対立となるので識別に困難を伴う例はほとんどないが、片仮名に注記された声点では東点と平声点との識別は難しい。A 方式の方が声点の注記位置においてより厳密なのである。

**5. アクセント体系**

前節で見たような形容詞終止形・連体形語末拍における下降調から高平調への変化はいかなる理由によりまたいかなる過程を経て起こったのだろうか。平安時代中期から鎌倉時代初頭に至る京都アクセントの変遷を、その音韻論的解釈(屋名池誠(2004)を参考とした)を実音調(HLFR で表す)とともに示したものが表 8 である。

平安時代中期以降助詞アクセントが独立性を失い、アクセント単位が文節単位となって多拍化した。その結果上昇調は実現に必要な長さを失って高平調に転じた。下降調も同様であったが下げ核の存在により下降は完全に消滅することはなく現在にいたっている。また、これと同様に平安時代中期では形容詞活用語尾の独立性が高く、終止形・連体形の語末アクセントは常に下

表8 下降調の消滅とアクセント体系

凡例：「○」は通常の1拍 「○○」は2拍分相当に引き延ばされた拍  
 下線(例○○○)は「押さえ」で下線のある拍を低く発音する。  
 「押さえ」がない場合は高く始まる。  
 「∩」は下げ核でそれ以降の拍を低く発音する。  
 「・」は名詞と助詞、形容詞語幹と活用語尾との境界

類	年代	----- 1000 -----	----- 1100 -----	----- 1200 -----
<b>1 拍体言</b>				
第一類 (戸)		/○○・○/ > /○○○/ > /○○/		
		H・H	HH	HH
第二類 (名)		/○∩○・○/ > /○∩○○/ > /○∩○/		
		F・H	FL	FL ~ HL
第三類 (手)		/○○・○/ > /○○○/ > /○○/		
		L・L	LL	LL
第四類 (檜)		/○○・○/ > /○○○/ > /○○/		
		R・H	RH	HH
(齒)		/○○∩・○/ > /○○∩○/ > /○○∩/		
		R・H	RL	HL
<b>2 拍体言</b>				
第一類 (庭・鳥)		/○○・○/ > /○○○○/ > /○○○○/		
		HH・H	HHH	HHH
第二類 (石・川)		/○∩○・○/ > /○∩○○○/ > /○○○○/		
		HL・H	HLL	HLL
第三類 (山・犬)		/○○○・○/ > /○○○○○/ > /○○○○○/		
		LL・H	LLH	LLH
第四類 (松・笠)		/○○○・○/ > /○○○○○/ > /○○○○○/		
		LH・H	LHH	LHH
第五類 (猿・聲)		/○○∩○・○/ > /○○∩○○○/ > /○○∩○○/		
		LF・H	LFL	LFL ~ LHL
第六類 (溝)		/○○∩○・○/ > /○○∩○○○/ > /○○∩○○/		
		HF・H	HFL	HFL ~ HHL ~ HHH
第七類 (虻)		/○∩○○・○/ > /○∩○○○○/ > /○○○○○/		
		FL・H	FLL	HLL
第八類 (紫苑)		/○○○○・○/ > /○○○○○○/ > /○○○○○/		
		LR・H	LRH	LHH
第九類 (蛇)		/○○○○・○/ > /○○○○○○/ > /○○○○○/		
		RH・H	RHH	HHH
第十類 (蝦蛄)		/○○∩○・○/ > /○○∩○○○○/ > /○○∩○○○/		
		RL・H	RLL	HLL
<b>3 拍形容詞</b>				
第一類 (赤し)		/○○・○∩○/ > /○○○○∩○/ > /○○○○∩/		
		HH・F	HHF	HHF ~ HHH
第二類 (白し)		/○○○・○∩○/ > /○○○○○∩○/ > /○○○○○∩/		
		LL・F	LLF	LLF ~ LLH

降調で実現していたが、その後独立性が弱まり、原撰本『類聚名義抄』成立頃には高平調で実現するようになっていた。

1 拍名詞第2類・2 拍名詞第5類は助詞アクセントが独立性を保っていた時代では常に下降調に実現していたが、独立性を失ってからは下げ核は助詞が低く着くことで表示しうようになり（どちらで発音しても他のアクセント型と区別できるようになった）、下降調・高平調のいずれにも実現するようになった。もっぱら下降調を示し、形容詞語末にもっとも多く注記されてきた平声軽点は、上記のアクセント変化によって機能負担量が減少させたために下降調を表示するという役割が理解されなくなり、結果として使用されることがなくなった。よって四声体系の差声方式では音声的に実現することもある名詞の下降調をも上声点で表示することになった。

## 6. おわりに

図書寮本『類聚名義抄』に最初に注記されたのは原撰本作成時に出典資料和訓にすでに注記されていた声点である。原撰本の撰者はそれらの声点の位置を変更する（自らのアクセントに従って声点を差し直す）ことはなかったと考えられる。和訓に声点のないものについてはおそらく新たに声点を差すことがあっただろう。改編本においてはさらに数多くの声点の追加（移点ではなく差声）が行われ、場合によっては自らのアクセントによる声点の訂正も行われただろう。ただしそれは全体には及ばなかったため、形容詞終止形語末の声点にはなお一定の割合で平声点（平声軽点の移し誤りの点）が残っているのと考えられる。

小論では図書寮本『類聚名義抄』に100例ある形容詞終止形語末の声点が、平声軽点と上声点が同程度の割合で分布することを以下のように解釈した。

- (1) 原撰本の撰者は出典資料の声点を正確に取り込み、その位置に変更を加えなかった。
- (2) 注記位置に平声軽点と上声点の「ゆれ」が見られるのはすでに出典資料の声点がそのような状態であったからである（平安時代後期写の『日本書紀』や『医心方』の声点にその実例があることを検証した）。
- (3) 形容詞終止形語末の音調は原撰本成立時には下降調から高平調の変化を終えていた。
- (4) 下降調から高平調の変化は、終止形活用語尾が独立性を失い、それまで長く引き延ばされて発音されていた拍が通常の一拍の長さに短縮されたために起こった変化である。
- (5) 原撰本成立時には平声軽点は使用されなくなっており、以降の差声方式は

すべて四声体系となった。

以上の結論は、声点は図書館本の編者によって差されたものであり、形容詞終止形語末の声点の「ゆれ」は下降から高平への変化が進行中であることを示しているとする通説(小松英雄(1971))と異なるところが多い。通説では図書館本『類聚名義抄』の声点は1100年頃の撰者自身の京都アクセントを反映する資料と見なされるが、私説では声点の多くは原撰本成立以前の資料から採られたものと考えたので、当然のことながら声点はより古い時代(F>H)の変化が起こったある一定の期間を含む)のアクセントを反映するものということになり、通説では保証されていた資料の均質性が私説では保証されなくなる。

図書館本『類聚名義抄』は形容詞終止形・連体形語末に上声点を注記するという、いわば四声体系の声点注記を内包しているともいえる、新しい特徴をもち合わせている資料でもある。濁音の拍の仮名に高い割合で双点を注記して濁音表示を行うことはおそらく原撰本における新たな試みである。図書館本『類聚名義抄』はアクセント表示と濁音表示の両方を、高い精度で行っている稀有な資料であるが、濁声点の全面的な使用はすでにこの資料においてアクセント表示から濁音表示へと舵が切られたことを意味しているだろう。

## 文 献

- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊(1997)『アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊(1998)『アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版
- 秋永一枝・坂本清恵・佐藤栄作(2001)『医心方声点付和訓索引』
- 川瀬一馬(1955)『増訂 古辞書の研究』雄松堂出版
- こまつひでお(1977)「上東型名詞存否論の帰結」『国語学』109 国語学会
- 小松英雄(1971)『日本声調史論考』風間書房
- 佐藤栄作(2000)『高松宮本・林羅山書入本和名類聚抄 声点付和訓索引』アクセント史資料索引16号
- 鈴木 豊(1990)「声点資料における濁音標示一層仁本『古語拾遺』を中心に一」『国文学研究』100集 早稲田大学国文学会
- 鈴木 豊(1985)「和語の声点資料における差声の体系について一『日本書紀』声点本を中心として一」『文学研究科紀要 別冊』第12集 文学・芸術編』早稲田大学大学院文学研究科
- 鈴木 豊(1999)「アクセント史研究における拍内下降」『国文学研究』128集 早稲田大学国文学会

- 鈴木 豊(2006)『『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓について』『論集II』アクセント史資料研究会
- 鈴木 豊(2010)「日本書紀講書とアクセント—『日本書紀』声点本の成立に関する考察—」『論集VI』アクセント史資料研究会
- 新美 寛(1936)「香字抄解説」貴重図書影印本刊行会
- 沼本克明(1981)「解題」『香薬字抄』古辞書音義集成 第十三巻 汲古書院
- 馬淵和夫(2008)『古写本和名類聚抄集成』勉誠出版
- 望月郁子(1974)『類聚名義抄四種声点付和訓集成』笠間書院
- 望月郁子(1992)『類聚名義抄の文献学的研究』笠間書院
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8-2 日本音声学  
会
- 山本信吉(1994)「半井家本『醫心方』について」『『醫心方』の研究 半井家本醫心  
方附録』オリエント出版社

—文京学院大学外国語学部—